

学生たちの観た日本

大学名： 清華大学

氏 名： 文藝林

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本のマナーには中国よりも多くのこだわりがある。日本のマナーの多くは古代中国に学んだものではあるが、日本は中国以上にそれらを継承している。

皆は顔を合わせると「こんにちは」と挨拶するだけでなく、さらに礼儀正しくお辞儀をする。お別れの際は相手の姿が見えなくなるまで手を振る。食事の前は「いただきます」と「ご飯」への感謝を伝える。また茶道体験においてはさらにいろいろなマナーを体験した。

もちろん、日本人は「他人に迷惑をかけない」との規範を忠実に守り続けている。そのため、日本において最も話す機会の多い「すみません」と「ありがとうございます」については、私も数日してから使えるようになった。

積水ハウスの見学の際、同社は顧客に対して行き届いた配慮をしていることに気が付いた。同社の最大の特徴は「テラーメイド」である。一般の人々以外にも、さらに高齢者用にはしごの下のライトや身体の不自由な人用にトイレやそのドアの取っ手をデザインするなど、様々な利用者の需要を考慮している。その他、震度8にも耐え得る耐震性に優れた窓枠を設計するなど、居住者の生命と財産の安全を保証している。さらに、太陽光発電や建設時のごみの回収利用などは企業としての社会的責任を示している。これらは資本主義国家においてはかなり稀なものである。

日本社会は個人であれ企業であれ、いずれも「他人を思いやる」習慣があり、この点は我が国、特に私たち大学生が学ぶべきだと思う。

大学名： 清華大学

氏 名： 鄧佳怡

テーマ： 1.国民性についての理解

今回の訪日においては、会社やホテルそしてレストランなど訪れた先々には皆庭園があった。日本の庭園は、欧米の庭園のように幾何学的図形が満ち溢れ、自然を征服するとの意志を示すものではなく、実際の景色のすべての精髓を庭園内に凝縮している。自然風景を基に発展した庭園は限りある空間や土地の上に大自然の景観を再現するもので、宇宙全体をその中に取り込み、人々が自然を征服するのではなく、庭園において自然を発見することを目指している。

中国は環境の保護においてその責任を果たしているのかについてホストファミリーの娘さんから質問があった。彼女は中国の一带一路や中国が政治経済分野において大国としての責任を果たしているのかについてはさほど興味はなく、それ以上に地球の海や土地に対して中国が保護の責任を果たしているのかに関心を持っていた。この神奈川県小田原にあるホストファミリー宅ではテレビの音が鳴り響くことはほぼなく、はかない一日の苦労や辛さを忘れさせるための突拍子もないお笑い番組などは、小田原の夏の夜の静けさと喧騒の中では違和感が生まれてしまうのではないだろうか。ここの人々は大都市東京で生活する人々に比べ、彼らの先祖や神との距離が近く、林を吹き抜ける風の音や田んぼの蛙の鳴き声といった環境の中で、彼らの心は常に穏やかである。もしこうした郷里の土地や庭園がなく、お台場の波や高層ビル群のライトやカラオケといったものだけでは、日本の「現代人」の心を落ち着かせるのには恐らく不十分であろう。

その他、日本語の音楽的感覚もこの庭園とマッチしている。その後知ったのだが、日本人は自然の神を崇拝し万物を

神格化しているため、日本語の発音において動物の鳴き声を真似るように日本語において多くの擬声語や擬態語を取り入れている。この森林面積が70%を超える国において、「万物には神が存在する」というのは工業化時代にあつて初心を永遠に保つとの国民の気持ちであろう。

ホストファミリーであれまたは訪問先の企業やホテル、レストランであれ、それらから私は、狭い場所に身を置きながらも心は広大な宇宙とつながり、心が次から次へと万世の自然に帰るとの本意を目にすることができた。これが私の見た日本の国民性である。自身の脈と天地自然のリズムが同時に動く際に、初めて生命の存在を感じることができるのである。

大学名： 清華大学

氏名： 葛霄飛

テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー

実のところ、私は日本のアニメやドラマがきっかけで日本に興味を持つようになった。小学四年生の夏休み、私は友人に誘われ『名探偵コナン』、『プリティーリズム・オーロラドリーム』、『夢色パティシエール』、『S・A～スペシャル・エー』等の日本のアニメを見た。そして『Angel Beats』は私の価値観の形成に一定の影響をもたらした。その後、私は10年間にわたってドラマ『相棒』を見ている。高校生の頃は重要なテストが終わる度に家に帰り最新作を見たが、この習慣は現在でも変わっていない。またここ数年ではこうした映像作品を通じて日本についてより立体的な認識を持つようになった。例えばドラマ『UNNATURAL』では男女の社会的地位の問題が反映され、ドラマ『Code Blue』では医療制度が反映されていた。

今回日本ではホストファミリーの案内の下、KIDDY LAND やコナンのグッズショップ、各テレビ局のグッズ専門店など多くのアニメ関連のお店を見かけ、そこではもちろん大金をはたいてたくさんのアニメグッズを購入した。

日本のアニメやドラマは多くの利益をもたらすと共に、多くの人が日本を知る上での一助となっていると思った。

大学名： 清華大学

氏名： 胡鈺彬

テーマ： 1.国民性についての理解

今回日本では、日本の人々の生活への向き合い方にとっても強い印象を持った。彼らの生活は楽しさに満ち、すべての物事について感謝をするなど、彼らの落ち着きある穏やかな態度は中国と明確なコントラストを示していた。ここでいくつか述べてみたい。

高台寺での座禅体験の際、法師からは、万物には神が存在するため、それらへの礼を失ってはならないとの神道教を日本では信仰しているとの紹介があった。おそらくこれが日本の人々が常に感謝の気持ちを持っていることの原因なのだろう。皆の心の中に神を信仰する気持ちがあり、彼らは他人や自分に対して責めたり恨んだりすることなく、自身が所有するものに対して感謝の心を持ち、食事の際には食事ができることへの喜びを示し、お茶を飲む際にはお茶を飲むことへの喜びを示すなど、こうした小さな感動を積み上げることで、彼らの生活に多くの楽観的なエネルギーを注入しているのだろう。

同じく高台寺では、お別れの際に法師から私たちに、今を大切に、この時の楽しさと幸せを感じてほしいとお話があった。私の経験からは、こうした考え方は法師の心にだけ存在するのではなく、日本の人々の心にも存在していると言える。私のホストファミリーである三浦さん一家の生活は楽しさに満ちていた。三浦さんはお子さんと一緒に地面にしゃが

み蟻に餌をやり、家では野球の漫画を1セット收藏し、さらにいつ家族を連れて相撲やまた応援している横浜ベイスターズの試合観戦に行くかを計画していた。奥さんも同様で、飼っている子犬をとっても可愛がり、また東京の変遷を紹介した写真を取り出しかつてのここがどこなのかを紹介してくれた。一方、私の両親は三浦さん一家とは大きく異なる。私の両親は常に心配事が絶えず、彼らには生活上の雑事が一杯で真の快樂がないように感じる。私は彼らの心からの笑顔を見ることはほとんどなく、ほぼ疲れ切った姿しか目にはしない。私が三浦さんにこうした点を告げた際、三浦さんは「それはきっと将来のことを考えているのだろう。私はそれとは違って、今を楽しむことだけを考えている。」と言って、目の前のお酒を飲み干した。

彼らのこうした落ち着いた穏やかな心理状態を羨ましく思うが、こうした境地に到達するのは簡単ではないと思う。なぜならそれには確固とした信念や信仰の他、さらに充実した物質的な生活基盤を必要とするからである。中国国内において私たちも当然落ち着いた生活をおくり、楽しみを見つけることを望んでいるが、常に現実によってその願いが打ち破られ、激しい競争と生活における負担は、私たちが心の中の理想郷をあきらめ、自身の生活の質を高めることに尽力することを求めている。そしてこうしたプロセスにおいて、生活における楽しみは次第に失われている。国が生産力を大きく高める戦略を打ち出したのも、恐らくこうした考えが基になっているのだろう。私たちにできるのは、心の中の素晴らしいものを可能な限り持ち続けることである。

大学名： 清華大学

氏名： 李巖

テーマ： 4.日中間の交流

5.アニメなどのソフトパワー

村上春樹は自身の出世作『風の歌を聴け』において「牛の胃の中の草」との有名な比喻をしている。牛にとっては新鮮で美味しい草でも私たち人類にとってはただのじっとり湿った塊であり、牛はなぜこれほど不味く見た目も良くないものを何度も咀嚼するのかとしか思わない。魯迅もかつて似たような「人類の悲しみと喜びは共通したものではなく、私は彼らが騒がしいとしか思わない」との言葉を残している。人と人との交流でさえこうなのだから、両国間にとっては尚更である。

しかし隔たりや矛盾そして互いに理解し合えないものがあるからこそ、交流が必要なのである。交流は、こうした状況においてこそ貴重で重要なものになる。政府の政治や経済面での交流のみならず、両国の人々、特に青少年同士の交流もある。たとえ心が通じ合わなくても、相手への尊重と友好的姿勢により他人に誠実に接することができる。

日本のアニメ文化は世界に名高い。私の多くの友人そして私自身も含め、皆日本のアニメ文化がとても好きである。これは日本のアニメ業界の繁栄のおかげであり、また国や業界がこうしたソフトパワーを評価そして普及しているおかげでもある。そして多くのアニメが表現する努力、家族愛、反戦といった思想は様々な物語やキャラクターによって観る一人ひとりの心に浸透している。これには私たちだけでなく、日本の青少年も含まれている。よって私たちには共通の趣味があり、また共通の認識も存在することから、自然とより親しく友好的な交流をすることができるのである。

今後、日中両国の青少年がより親しく友好的に、誠意ある交流をし、両国の関係をより高いレベルに引き上げることを願っている。なぜなら、人類の悲しみと喜びは共通したものではないとは言え、私は彼らが騒がしいとは思わないからである。

大学名： 中国人民大學

氏名： 劉瑩瑤

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本人は細やかで、気遣いができ、配慮が行き届き、常に他人を思いやる、これらは私がこの数日間日本において最も強く感じた点である。

日本人の他人への配慮は些細な部分にとっても良く表れている。日本のバスのシートベルトは乗客が見やすいように異なる色でデザインされている。企業の製品デザインや管理においてこの点はより明らかである。積水ハウスを見学した際、日本の家屋の設計では、家庭の雰囲気、高齢者や子どもの利便性、環境へのやさしさ等の要素を考慮し、それらを細やかな部分に活かし、人に温かみと落ち着きをもたらしていることを知った。

日本人はまたとてもマナーを重視している。私たちが会った日本の従業員の皆さんは常に礼儀正しく、他人を思いやり、あらゆる事を考慮している。日本の道路はとてもきれいで、ごみ箱は置かれていないものの、人々は自らごみを持ち帰っている。その他、日本のトイレもまた常に清潔である。これらは人々の意識的な行為とは切り離すことができないものである。

こうした他人への思いやりやマナーの重視は日本の教育方法と大きく関係する。私のホストファミリーを例にすると、娘さんたちは小学校の低学年だが、とても気遣いができ、進んで母親の家事の手伝いをし、ゲストにハンカチを手渡したり、行儀よく食事をしたりする。私はこうした文化的教育の違いを強く感じ、こうした点は中国の学生や企業、ひいては中国人全体が学ぶべきものだと思った。

大学名： 中国人民大学

氏名： 易楚妍

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

「迷惑」をかけない日本人

日本に到着して間もない頃、バスに乗った私は窓の外の横断歩道の「景色」に目を奪われた。それはちょうど赤信号で、人々は二列にきれいに並んでいた。彼らの中には制服を着てリュックを背負っている人もいればスーツを身に着けブリーフケースを持つ人もいるなど、彼らは皆登校や出勤を急いでいることが見て取れた。現在の中国においては、赤信号になった際に大勢の人が急いで道路を横断する光景はさほど目にしなくなった。その理由は蛍光色のジャケットを身に着け、笛を吹きながら交通整理をするとても怖い協警にある。設備が整った都市では、さらに道路の大パネルにルールを守らない人をリアルタイム表示している。だが日本でのここ数日間において、私は道路でそうした横断歩道の秩序を管理する警官の姿を目にしたことはない。道路を横断する行為を通じて一つの都市ひいては一つの国家の素養を知ることができると思うが、私たちより上の中年や高齢の世代はともかく、私自身でさえも幼い頃から「ルールを守り、礼儀を知る」教育を受けて育ってきたにもかかわらず、人のいない小さな道路や急いでいる時などは、信号の色を気にすることは少ないという事実には多くを考えさせられた。

ホストファミリーと過ごした週末では、私たちは横浜のとあるショッピングモールに向かった。一階のエレベーター前では同じように二つの列ができていた。ホストマザーはお子さんの世話をしながら当然のように列の最後尾に並んだ。そしてエレベーターのドアが開くと皆が順序良く前に進んだ。横断歩道前で行列を見た時の私は単に日本人の素養の高さを感じていたが、ショッピングモールのエレベーター前の行列を見た時の私は真に「カルチャーショック」を受けた。食事の際にホストファミリーにこうした点について尋ねたところ、彼は少し考えてから、無駄に他人を待たせることを望まないからと答えた。

「無駄に他人を待たせることを望まない」、これはすべての回答の中で私が最も思いも寄らなかったものである。私は中国において、各自が皆自分の利益を最優先するということにとくに慣れている。そのため私たちは日頃から、あちこ

ちで割込みや赤信号の無視、痰を吐く行為、ポイ捨て、ひいては頻繁に人々を心配させる食品安全の問題などを目にしている。もちろん、自分自身の利益を得ようとする事自体は一概に悪いとは言えないが、もし皆がそうした気持ちのわずかでも他人に与え、列に並ぶ際にもし自分が割込みをしたらどれだけの人を無駄に長く待たせることになるのかを考え、道路を渡る際に赤信号を無視したらどれだけの警官や運転手に気を使わせるのかを考え、企業意思決定者は、もし品質を疎かにしたらどれだけの消費者が無駄に害を受けるのかを考えることができれば、私たちの暮らす場所は今より少しは良くなるのではないだろうか？

大学名： 中国人民大学

氏名： 張悦洲

テーマ： 1.国民性についての理解

今回の日本訪問で最も印象深かったのは、企業や個人のいずれも高い環境保護意識を持っていたことである。日本国民の環境保護意識については言うまでもなく、ごみの分類の観念はすでに一人ひとりに根付いている。私の故郷の張家港は文明都市を5回連続受賞しており、日本のようにきれいな街路を有している。市民の素養が比較的高いこともその理由の一つではあるが、やはり環境衛生作業員による朝晩の清掃を必要としている。一方、日本では私はこれまで環境衛生作業員もしくは清掃車を目にしていない（もちろん私が寝ている時間帯に日本の環境衛生作業員もしくは清掃車が現れている可能性もある）。同様に、ごみの分類も中国では通常再利用可能なものと再利用できないものの二タイプに分かれている。しかしある時、私がごみの仕分けをしていたところ作業員はゴミ箱を開け、再利用可能なものと再利用できないものを混ぜて回収していったのを目にした。そして、多くの人はゴミを捨てる際に分類をせず適当にごみを捨て、加えてごみの回収時にも種類毎の回収をしないため、中国のごみの分類は表向きで形式化したものに止まり、真にその役割を果たしてはいない。

積水ハウスを訪れた際、同社がエネルギーの主な出入りルートである窓に対して改造をすることでエネルギーを効果的に節約しているのを目にした。また、屋根において太陽光発電を利用し、併せて発電装置を瓦状にデザインすることで美しさも兼ね備えていた。そして1980年代の住宅は平均で二酸化炭素を5.6 m³（呼吸は含まない）を放出していることから、家屋の設計において観葉植物を活用するなど家屋の自然への負担を軽減している。

最終日はホテルニューオータニの生ごみや汚水の処理システムを見学した。生ごみはまず脱水処理で80%前後の重量を削減した後、発酵をして肥料として農家に提供される。厨房の汚水はまず微生物により水中の汚れを取り除き、一部の大きな不純物については沈殿池の沈殿を通じ水中から分離し中水とする。ホテルニューオータニではその中水を主にトイレ洗浄用に活用している。担当者からは、こうした水はすでに飲用できるレベルに達しているとのお話があった。

10数億の人口を抱える大国である中国は、一人平均の自然資源量がとても不足している。こうしたことから、私たちは尚のこと積水ハウスのように環境保護の理念を製品に活かし、ホテルニューオータニのように生ごみや廃水の再利用を実現するなど、日本企業の環境保護理念に学ぶ必要がある。

大学名： 中国人民大学

氏名： 楊昊翰

テーマ： 1.国民性についての理解

「菊と刀」は私の日本に対する知識のベースとなっている。「菊」は日本の皇室の象徴であり、また日本人の優雅さ

を表している。そして「刀」は日本人の「我慢強さと柔の中に剛を持つ品性」を表している。今回の見学を通じて私は日本の国民性についてより深い理解を得ることができた。

「礼」は日本人の最も突出した特徴である。日本人は温和で礼儀正しく、秩序を重んじ、初対面の際は必ずお辞儀と共に挨拶をし、お別れの際は相手の姿が見えなくなるまで手を振る。日本のサービスの質は世界一と言うことができ、コンビニの店員やホテルのスタッフであれまたは企業の担当者であれ、彼らは私たちに対して心からの笑顔とお辞儀で行き届いた対応をするなど、私たちは日本において我が家に帰ったようなおもてなしを受けた。日本人はサービス第一の理念により、マナーと行き届いたおもてなしにより世界からの賞賛を受けている。

資源の節約、環境保護の重視、きれい好きといった点もまた日本の大きな国民性である。日本は資源が乏しく災害の多い国であり、日本国民は常に目まぐるしく変化する自然との戦いを粘り強く続けている。日本の街路ではごみ箱を見かけることはほとんどなく、東京の街中でわずかに見かける程度で、それらのいずれも厳しい分類がされている。日本の大学生との交流から、日本はこうした方面の教育を特に重視し、社会实践により環境保護の観念を人々に浸透させていることを知った。またホテルニューオータニの100%の資源回収率にも感銘を受けた。私は、中国が教育面で持続可能な発展のためにより多くのサポートを提供することを願っている。

業務の側面では、日本は「業務において学ぶ」、「終身・長期雇用制」を打ち出している。みずほ銀行や三井物産の従業員との交流の際、日本企業は従業員の実践経験や総合的な素養、そして従業員が入社した後の再研修つまり業務において学ぶとの理念をより重視していることを知った。ホストファミリーの大学一年生の息子さんは週末の午前はバイトをするなど、日本の学生もまた早くから社会に溶け込んでいる。

日本の学生はさほど国際化した考え方を持っておらず、日本国内の人口も年々減少する中で多くの学生は日本国内で教育を受けることを望んでおり、こうした方面では保守的になっている。

大学名： 中国人民大学

氏名： 陳瑞齊

テーマ： 5. アニメなどのソフトパワー

日中の美術館の比較から見る北京市内の美術館の向上への指摘

ホームステイの初日、私はホストファミリーと共に横浜市美術館を見学した。横浜市美術館の内部は広くて明るく、非常にデザイン性が高く、19世紀末から21世紀初めにかけての日本の様々な流派の芸術品が展示されていた。そしてそれら展示品の観賞をした私は非常に大きな衝撃を受けた。横浜市美術館と北京の中国美術館を比べた場合、主に以下の二つの違いがある。

一つめは展示品の変更の頻度で、横浜市美術館は2ヵ月に一度変更をするが、中国美術館はスパンが非常に長い。

二つめは内容とテーマで、横浜市美術館の展示は一つのテーマから発しており、各年代、各流派、各形式の作品、写真、彫像、装置などあらゆるものを展示している。またそのテーマ選択もしっかりとしており、例えば「目」をテーマとした展示では、各展示品はいずれも目をポイントとして強調していた。それに比べ、中国美術館の展示テーマの多くは芸術家の個展もしくは大きな歴史・政治的事件を記念するもので、強い宣伝と教育の目的を有しており、それに伴う展示品の芸術様式も単調である。

ホストファミリーからは、市は美術館の建築や維持を市民からの支持率の獲得手段としているため、美術館への資金も潤沢で展示も「好みに迎合している」とのお話があった。実のところ、さらに大きな柔軟性や自由度を持った赤レンガ美術館のような私立美術館は北京においてもひっそりと台頭しており、大型の公立美術館がカバーできない空白を埋めている。だが私立美術館は生まれつき資金や規模面での劣勢を抱えている。そのため政府による投資と入場料収入を組み合わせた美術館の運営モデルは、北京のこれら二種類の美術館の長所を中和し、より良い公共芸術を市民に提供

することにつながるかもしれない。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 鄒可馨

テーマ： 4.日中間の交流

日中間の交流は現在まだまだ不足しているが、これは日中関係には非常に大きな発展の潜在力が秘められていることを私たちに告げている。

私にはかつて日本の友人がいたが、彼らとの交流は生活や娯楽の面で止まっていた。今回私は京都大学と一橋大学の学生らと女性の地位や実習への向き合い方について踏み込んだ探究をした。私たちはこの二つのテーマから多くの関連する話題について話をした。その際、私たちは経歴こそ違おうが、見解については強い共鳴が生まれたと感じた。こうした学術や社会をベースにした討論は、私たちの間に高いレベルでの共感を生んだ。

次に、私とホストファミリーの志村さんとの間でも踏み込んだ交流があった。私たちは文物や古跡から日本の文化や政治・経済制度について語り合い、私はアニメ等のソフトパワー以外の日本のハード面での発展の状況について知り、私自身日本人の人々への好感が大きく高まった。

最後に、大使館でのお話を通じて、日本人は中国人のように中国観光に熱中することはなく、日本人観光客の多くはビジネスマンや高齢者であり、その現状は文化交流にとっては完全に不十分であることを知った。

以上から、日中交流はまだ大きな潜在力を秘めていると私は考えている。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 申李潔

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本訪問の三日目、私たちは箱根天成園に宿泊したが、その際の一つの些細な部分にとっても感動させられた。エレベーターのボタンにおいて、このホテルでは通常的位置以外に、さらに低い位置にもボタンを配置していた。これは車椅子の人が操作しやすいだけでなく、子どもが一人で乗る際にも便利な作りであった。ボタン程度は恐らく通常よりいくつか多めに配線すれば設置できるであろうが、まさにこうした点が日本の高齢者や身体の不自由な人を思いやる仕事ぶりを示していた。

そうした些細な部分以外にも、積水ハウスではさらに高齢者や妊婦への配慮をすべての設計に融合させ、企業の発展において守るべき基準の一つとしている。階段の高さの設計から玄関の手すりの配置までいずれも年齢を重ね、関節が硬くなり行動が不便になった高齢者への配慮が示されていた。また企業全体としてさらに、年齢層や状態の異なる家族全員にとって住み心地の良い家屋の建設に向けて尽力するなど、こうした点は顧客の切実な要望を満たすため些細な部分の需要から始め、各段階において快適さを実現するとの真摯な姿勢を示している。これらは私たちが学ぶべきものである。

思いやりや細やかさ以外にも、ANAの帰国便では、各人の目の前のパネルは真正面に座る人だけしかその表示内容がわからないように設計され、左右別の角度から見た場合、パネルは真っ黒になっていた。これは隣り合う人同士の気まずさを大きく解消し、乗客各自にプライベートな空間を提供するものであった。

以上から、日本という国は我々には中々注意が及ばないあらゆる部分において改良をし、常にその幅広いヒューマン

ケアと気遣いを示している。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 馬伊彤

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本を訪れる前は実のところ、「国民性」というものについては半信半疑であった。

中国は土地が広大で資源も豊富、また人口も多く、大学内には様々な人が存在しているため、私が中国人の国民性をまとめようとしたら言葉に困ってしまう。そんな私だが日本を訪れて以降、日本人の「ルールを守る」、「他人に迷惑をかけない」という点については心から納得するようになった。まず先に「すみません」と言ってから他人と話を始める、他人に対して会釈をする、相手が見えなくなるまで手を振るといったことがすでに習慣となっていた。私は帰国後もこうした行為を続けていきたいと思う。なぜならそれは自分が尊重されていると感じさせるものだからである。ホストファミリーと共に過ごした一日半の時間では、親しみ以外にも彼らの私への配慮を感じた。会ってすぐにこの2日間の移動用に交通機関のパスを渡してくれた、渋谷でたまたま見かけた seventeen のポスターを彼らに見せたところ、彼らは自宅内で seventeen の曲をかけてくれた、私に付き添い街の散策をしてくれた、外食のたびに私が食べたいものを尋ねてくれた、これらいずれにも私は感謝と親しみを感じた。また私がホストファミリー宅に入ると、カレンダーに「ホームステイ、welcome to Japan」と書かれているのを見かけ、これには自宅に戻ったような気持ちになった。日本人は本当にマナーと距離感の調節が上手で、尊重や親しみを感じさせると同時に、私のパーソナルな空間も残してくれていた。

その他に国民性について考えさせられたのは三井物産での懇親会の席上だった。会場は皇居に近く、その大きな窓からは辺りの景色が一望できた。青々とした木々、整然とした街路にきれいな色の雲が合わさった景色は素晴らしかった。これには、ごみのポイ捨てをしないという点についても日本人の心の中に浸透しているのだと思った。以上の二つについて、中国はいつ日本に追いつくのかは分からないが、私は今後自ら率先して行動しようと思う。千里の道も一歩からという言葉もある。私は環境保護やマナーの意識に関して身近な人の手本になりたい。この二つは今回の旅で最も印象深かったものである。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王誉欽

テーマ： 4.日中間の交流

日中の文化には多くの共通点がある。長い歴史や歳月において、日本は中国から多くを学び、そこからさらに自身の国情を加えて大和民族の特徴を形成していった。服装、飲食、風習、記念日などこれら一つひとつは日中の交流における突破口となり、日中の人々のさらに深い交流に便益をもたらすものである。交流において私たちは多くの共通点と共に多くの相違点を発見する。そして相違点が形成される原因の分析において、私たちは心からの笑顔と共に両国の文化交流がどれだけ密接なのかを感じることができる。交流をする際の態度は良い対話をするための前提であり、双方が心を開いてこそ交流が進み、心を通じ合わせることができる。その他には言語能力も必要である。英語は世界の共通語となっているが、それは西洋からのものであり、東洋文化を表現するには物足りない部分が存在する。中国語もしくは日本語で交流することが最良だが、それには日中双方の若者が相手の言語を学ぶといった努力が必要になる。

いずれにしても、日中両国は一衣帯水の隣国であり、歴史、経済、文化、社会において多くの交流をしており、その先行きは明るいと言える。私たち青年は、両国の友好交流を促進し東アジアの繁栄に貢献するべく努力をしていかなければならない。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王琪琦

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本人の根本には「他人に迷惑をかけない」という一つの信念があり、これにより彼らはマナーを重んじ周囲の人の気持ちを注意深く汲み取っている。

今回の日本訪問においては、至る所でこうした信念が感じられた。

当初、日本側から配られた資料はすべて封筒で閉じられさらに各自の名前が記されていた。また資料の内容もそれぞれ異なり、日本語ができる学生には日本語版の資料を、英語ができる学生には英語版の資料が配られた。こうした細かな配慮にはとても感動させられた。

その後日本を訪れてからは、彼らのマナーの良さや思いやりを直接感じる事ができた。深々としたお辞儀、エレベーターのドアが閉まらないように支える手、非常にきれいなトイレ、店員の非常に丁寧な対応、各商品用の細やかな包装などなど、こうした部分が示す思いやりや気遣いはとても感動的であった。

日本の観光業が発達しているのはこうした点が理由なのだろう。お客さんはきっと本当に自分が「神」であると感ずるほど尊重してお世話を受けている。こうしたサービスや体験は日本以外の場所では体験できないものだと思う。ここで直接体験をした後は、この土地を愛さない人はいない、もしくは日本への印象は大きく変わるはずである。

またこうした点は人と人との関係における潤滑油のように社会の摩擦を減らし、より調和が取れていくと思う。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 邵劍博

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の8日間の「走近日企・感受日本」活動では多くの事を感じ、そして学んだ。私たちが常々言う「百聞は一見に如かず」の言葉通り、今回身をもって日本を体験し、私たちが学校で学ぶ日本とは異なった印象を持った。ここでは私の日本への理解や印象について簡単に述べてみる。

今回、多くの日本企業を見学したが、その中で京都にある積水ハウスはとても印象深かった。まずはディテールの部分について、積水ハウスの多くの設計においては日本人のディテールへのこだわりや他人への配慮といったものが感じられた。例えば、身体に不自由がある人用に設計された部屋の見学の際、スタッフは皆に身体の不自由さを体験する装置を装着し、実際に自身が高齢になった時の身体の状態を体験させてくれた。その装置を身に着けると、腰を真直ぐに伸ばすことができず、足取りも重くなり、数歩歩くのもとても困難で、玄関外の階段がとても高く感じられた。この時、積水ハウスの設計におけるささやかな改良がどれほど感動的で有難いものなのかを感じる事ができた。そして高齢者は生活において多くの不便を抱えていることを認識した。それと同時に、積水ハウスの設計における細やかさや配慮にとっても感

銘を受けた。これもまた日本の魅力の一つだと思う。

その他、積水ハウスのエコ素材技術もとても優れていた。スタッフからの紹介の際、積水ハウスでは省エネ・創エネ素材の発展に尽力し、自然の保護を自身の責務とし、企業の社会的責任感を従業員一人ひとりに浸透させているとのお話があった。この点については感慨深いものがあった。現在の中国は循環経済の発展段階にあり、日本はこの点については世界をリードするレベルを有している。技術や政策、または環境保護意識の育成等の面のいずれにおいても学ぶべき部分がある。環境保護について中国は未だ多くの問題を抱えており、今回私たちは自身に不足しているものを目にすることができた。大学生である私たちは今後さらに努力を重ね、初心を忘れず、使命を心に刻み、より良い中国そしてより良い世界のために貢献をしていく必要がある。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：楊璐玥

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本に関する様々なうわさや紹介はかねてより沢山耳にしているが、今回ついに日本を訪れることができた。個人旅行とは違い、私は今回各分野で名を馳せている多くの日本企業を訪問した他、日本の優秀な大学での交流も行った。こうした見学の機会は一般的な観光や留学で来ている人にとっても非常に貴重で得難いものである。今回の旅を通じて私は、この旅は一年や二年の交換留学以上に、より多くの日本への知識を得ることができるものだと感じた。

日本の行き届いたマナーについてはかねてより耳にしていたが、今回の旅ではこうしたマナーやおもてなしを数えきれないほど実際に体験することができた。ホストファミリーと買い物に出かけた際に、ちょうど閉店時間に重なったが、聞いていた通りに通路に面したすべての場所には各店舗の店員が立ち、お客さんが通り過ぎる度に丁寧にお辞儀をして「ご来店有難うございました」と声をかけていた。その所作はまたとても自然で手馴れたものであった。こうしたお客さんへの尊重と礼儀は中国とはまったく異なったものである。これは中国ではお客さんを尊重しないということではなく、中国の店員はわざわざ通り過ぎるお客さんに向かって礼を尽くすことはしないということである。こうした礼儀の様子やその厳格さには驚かされた。

また、今回の旅で最も印象深かったのは最初に見学した積水ハウスであった。そこでは高齢者や身体の不自由な人々用に設計されたあらゆる室内設備を展示するスペースがあった。それらは決して大きな創意というものではなく、玄関の壁の手すり、追加の低い階段、ブラインドの扉を幅広の引き戸に変える、幅を10センチ広くした通路等、部屋の内装を多少変えたただだが、身体の不自由な人にとっての利便性を大きく高めていた。変化自体は小さいが、こうしたわずかな変化に気付くことは簡単なことではない。身体に不自由なく自由に動くことのできる私たちの中で、将来自身が老いた後の状況について考える人はほとんどいないかもしれない。老いた後は私たちがかつて暮らしていた家屋は障害だらけとなり、私たちの日常生活もまた非常に不便になる。積水ハウスの設計者はこうした将来に起こる可能性のある状況を考慮し、さらに暮らす人へのプランニングや設計を事前に行っている。こうした将来を事前に考えるとの設計における考え方は、中国の家屋の改装では目にするにはほとんどない。これは住む人の現在ひいては数十年後の未来を潜在意識で考えるという仕事の精神であり、こうした精神は私たちが見習うべきものである。

今回の日本訪問で得られたものは、こうした積極的に他人を思いやる精神や将来に起こる可能性のある変化に着眼するとの長期にわたる目的以外にもまだまだ沢山あった。今回の旅が私の将来の生活や学習において今まで以上に大きな影響をもたらすことを願っている。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：李澤茗

テーマ：1.国民性についての理解
2.集団帰属意識の強さ

今回の「走近日企・感受日本」活動において訪れた多くの企業の経営モデルやビジネス構造はそれぞれ異なると思うが、その経営理念においては顧客第一及び協調性や将来的な実行可能性を考慮するとの発展の理念が徹底されている。

まずは協調性と集団帰属意識について。みずほ銀行の見学の際、同銀行の職員から「One Mizuho」の理念について紹介があり、これはたとえ海外の支店と国内の本店の発展における歩調や政策が異なる場合でも、その根本的な企業理念や一体性の概念は変わらないというものであった。

次は「顧客本位」、即ち顧客の視点に立ち顧客の需要を満たすと同時に、より良い生活レベルやグループの発展を追求するというものである。積水ハウスの見学の際、私たちは同社が異なるお客さんの様々な要素を考慮し、足下のライト等生活の利便性を高める優れたものを設計すると同時に、多種多様なキッチンを選択可能など、最も利便性が高く適したプランを提供している様子を目にした。些細な部分から優劣というものが分かり、日本の地下鉄駅構内の自動販売機の向きもまた調整がされている。現在の向きは人々が電車を待つ際の購入に便利であり、それは販売額の向上にもつながるなどウィンウィンを実現している。これもまた国民意識におけるモノづくり精神と言えるだろう。

この他、積水ハウスの納得工房内のエコガラス設計はエネルギーの消耗を減らし、生態環境の保護を可能とする、みずほ銀行は日本を飛び出し世界の日本企業にサービスを提供している、三井物産は世界戦略に注目しているといったグローバル意識も存在する。イノベーションを実現し、現在の利益だけでなく人類の未来を考慮し、人類と宇宙の共同の発展、幸福を己の責務とし天下を心に抱く、こうしたグローバル意識や環境・未来意識もまた一つの国民意識である。

こうした点については中国国内の企業や国民の意識にも存在するが、日本ほど際立ってはいない。私たちは中国のより良い発展のために日本のこうした優れた点から学ぶと同時に人類が住む地球を長生きさせ、人類の生活をより幸福に、また生活の質をより高めるべく協力をしていくことも必要である。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：陳雪

テーマ：1.国民性についての理解
2.集団帰属意識の強さ
3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流
6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

8日間の旅も終わりを迎え、手を振りお別れをする時になって次第に日本への名残惜しさがこみ上げてきた。日本で体験したすべての事柄は、自分自身、私たち世代、私たちの街ひいては私たちの国について多くの事を私に考えさせた。

空港に降り立ち熱烈な歓迎を受け、ホテルについてから日本人の細部へのこだわりや「人」への思いやりを次第に感じたことを今でも覚えている。いかなる場所でも優しさや思いやりを感じ、とても心地良かった。今回の旅において私たちは比較的ハイクラスな体験をしたが、日本の人々はすでに秩序と細やかさを自身に浸透させていて、彼らは国や社会が形成するあらゆるルールを守り、自身と外界との関係を適切に処理している。これが私の日本国民への印象である。

日本企業の見学では、ほぼすべての企業が環境保護を経済発展と同様に重要な存在と認識していた。また各プロジェクトの実施前後においては、自然との最大限の調和や共生を謳い、持続可能な発展を追求していた。積水ハウスでは身体の不自由な人や高齢者のために積極的に解決方法を模索し、より便利な生活を提供するべく努力するというヒューマンケアの姿勢がとても印象的だった。また同社では窓をスマート分化し、光の屈折原理等を応用し窓の冷却と保冷、加熱と保熱をするなど省エネの目的を実現している。またさらにホテルニューオータニのエコ施設の見学時には、ホテル内のごみは外部に排出されず、各種の機械を通じて処理がされ、利用可能な物としてホテルで再利用されているとの紹介があった。例えばホテル内で発生した生ごみは分解され肥料として土に還り、再び食料として食卓に上がる。またトイレで発生した廃水は中水処理された後に再利用され、しかもその純度は極めて高いものとなっている。このことから、日本は環境保護の面においてそれを支える理念があるだけでなく、積極的に創造している。彼らは理念を科学技術の成果に変え人々の生産や生活に応用することで人と自然との共生を実現するなど、地球上の人類の幸福に取り組んでいる。

日本企業の見学の後は懇親会があったことから、私たちはこぞって彼らに質問をした。日本の企業制度は終身雇用制で従業員は企業の一員となった後、業務において問題が起きても解雇されることはない。なぜならそれは業務自体の原因であり従業員自身の原因ではないと考えているからである。たとえこの従業員がミスをしなくても他の従業員はミスをする可能性があるため、ミス自体は許されるのである。彼らは入社後にしっかりと働き、会社に富をもたらし、チームと共に励み発展を続けるだけで良い、これが従業員全体と経営者の本音である。給与には大きな差は生まれないが、集団意識は彼らに浸透しており、特に会社という環境において、彼らは集団意識を最大限に発揮する。日本が世界の強国となったのは彼らの国民性と大きな関係があると言わざるを得ない。

中国大使館内で感想の紹介を終えた後、私たちは張参事官からのお話を拝聴した。今年は中日友好交流促進年で、李克強総理も5年以内に中日双方に数百万人規模の交流を実現するとの意向を述べている。現在、中国から日本を訪れる人の数は目標の数値に近づいているが、日本から中国を訪れる人の数は大きく不足している。そのため私たちはこうした状況となっている原因や目標達成のために今後どういった措置をとるかを考えなければならない。これについては各方面、各分野において私たちは学び、考え、検討をしていく必要がある。

今回の8日間の日本訪問では、日本の全貌については知ることはできなかったが、私個人としては、発展途上の中国には先進国である日本に学ぶべき部分はまだ沢山あると考えている。良い部分を吸収し不要なものを捨てることでのみ私たちは発展を続けることができる。そして、こうすることでのみ日中の友好は安定するのである。

大学名：北京建築大学

氏名：鄒敏

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の日本訪問のテーマは「走近日企・感受日本」であり、一般的な観光ではこうした多くの優秀な企業に触れる機会はない。これらの企業の理念の中で最も驚かされたのは日立製作所中央研究所の人類の発展に関わる各研究そして三井物産が打ち出している「大切な地球とそこに住む人々の夢溢れる未来作りに貢献をする」という理念であった。こうした壮大な理念に私は強く感動した。また京都大学での交流においても、多くの日本の学者は名誉や利益また驚くべき成果のために研究をするのではなく、自身の興味を追求し、人類の幸福と発展のためだけに一生を捧げていることを知った。急速な発展の段階にある中国の現在の利益だけを追求する手法は、人々の長期的な発展そして世界や人類全体に貢献するとの思考を制限している。こうした点は多くの日本企業がなぜ100年以上の歴史を有しているかの理由と言えるであろう。

次に、日本の企業と国民の環境保護意識もまた私たちが学ぶべきものである。例えば積水ハウスでは、家屋を建てた後に庭に現地の植物を植えることで小動物を引き寄せ、現地の生態のバランスを維持している。こうした環境保護の理念は技術的なものに限らず一種の意識となっている。こうした意識は中国の建設業界においては欠けているため、若者世代の建築業界関係者が学んでいくべきだと思う。

最後に、日本企業で働く中国人・日本人従業員との交流では、日本企業の一部の勤務制度と日本と中国の勤務における違いについて知ることができた。中国人はスピードを重視し、プロセスにおいて試行錯誤をする。対して日本人はプロジェクトの初期に様々な対応策を準備し、その実行可能性を十分証明してから行動に移すことを好む。また中国企業においては個人の能力がキャリアアップに重要で、日本企業はチームワークにおける能力をより重視している。こうした違いは両国の発展の現状の違いから生まれている。私自身はまだ仕事をしていないため、この先機会があれば日本で一定期間仕事をし、こうした違いについて直に体験したいと思う。

大学名：北京建築大学

氏名：郭伊寧

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

ここではソフトパワーについて述べてみたいが、アニメとは関係がない。みずほ銀行の従業員は自社のロゴが入った衣装を着て私たちとの交流会に参加していたが、この一幕に私たちは大きな衝撃を受けた。この衣装は日本の伝統的な宗教服で、高い快適性とアジア人の身体的特徴に適した裁断がされ、ここ数年日本のファッションブランドによる改良の後に市場に出回り、世界的に流行している。これは私の話すテーマであるファッション文化から見るソフトパワーの発信につながるものである。

休憩時間や自由行動の時間、私はほぼ「ファッションの聖地」である原宿にいた。勢いのあるファッション産業が日本にどれほどの利益をもたらしているのかについては言わずもがな、その日本の知名度への貢献については否定のしようがない。ファッション関連のお店、日本文化と密接に関連したプリント柄、敬虔な巡礼者や前に述べたみずほ銀行の従業員が着ていた衣装など、私はこれらに文化への自信を見た。それではこうした文化への自信と文化的雰囲気はどこから来るのか？

まず文化面において、日本のファッションブランドは自国の文化を掘り下げさらにそれを製品上に表現することに長けていて、それが時間の経過とともに文化への自信を生んでいると私は思う。日本はその人間本位の理念と高レベルの品質管理を店舗の内装や製品の設計のあらゆる面に融合しており、こうした様々な要素が優れた文化的雰囲気や影響力を生み出し、そうした中でソフトパワーが向上するのも自然のことであると言える。

大学名：北京建築大学

氏名：梁慶慶

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本は有名な礼儀の国であり、敬語という特別な言語文化があることについては置いておくが、その行為や各種設計におけるディテールのいずれにも日本のマナーや思いやりが示されている。

8日間の活動では、トイレの設計にもっとも感銘を受けた。日本のトイレは便座タイプでそれ自体中国とは多少異なる。そしてトイレトーパーは水に溶けるため、直接便器に捨てることができる。そのためごみ箱が埋まることなく清掃作

業員の負担を軽減すると同時に公衆トイレの清潔さも維持している。さらに一部のトイレでは水を流す音を発生させることで気まずさを軽減するなど、とても配慮が行き届いていると感じた。しかも、定温のトイレもあり、座った際に冷たく感じることはなく、冬でも快適に使用することができる。

以上は公衆トイレのみの話で、ホテルの浴室ではバスタブや鏡の設計などからまた違った体験をすることができた。まずバスタブだが、その周囲には必ずバスタブから立ち上がりやすいように手すりがあった。次に、シャワーの水温も自分で調節することが可能で、水温も見ることができ、お湯と水をそれぞれ調節する必要がなかった。そして鏡だが、私が今回宿泊したホテルにおいてはいずれも曇り防止処理がされていて、入浴を終えた後でも鏡を拭くことなく直接使用することができてとても便利であった。たった鏡一つの変化で体験は大きく変わる。

もちろん、これらは日本のマナー文化の一部であり、その他にも会釈やお辞儀、お別れの際に相手の姿が見えなくなるまで手を振るなど、これらはいずれも日本特有のマナーである。皆は常に他人を思いやり、そうした点は日本のあらゆる面に示されている。

大学名：北京建築大学

氏名：孟昭昕

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本は非常にマナーを重んじる国である。私たちが企業訪問や大学での交流を終える度に、中島さんはバスに乗り込んだ私たちに外で見送る人に手を振ってお別れをするよう伝え、窓の外の彼らもまた姿が見えなくなるまで私たちに手を振ってくれた。私たちがまた車が曲がる際は反対側に移動して手を振った。日本に来てから最初に覚えた日本語は「すみません」と「ありがとう」であった。食事の際に同年代の学生や友人を見かけた時、また企業との交流においてはこれらの言葉を使い、さらにお辞儀も加わる。マナーはすでに日本人に浸透しており、彼らの観念の一部となっている。こうした礼儀やマナーについては私自身も可能な限り自分の周囲の人へ届けたいと思う。彼らのマナーは程良いもので、疎遠さや気まずさはなく、とても暖かさを感じるものである。

日本人の思いやりは「他人に迷惑をかけない」という点に示されており、こうした考え方は私たちが学ぶべきものである。自分でできることは自分で行い、他人への負担を減らすことは、他人への迷惑によりもたらされる衝突を減らすことにもつながる。積水ハウス総合住宅研究所の見学の際、私たちは、体の不自由な人や高齢者が快適な生活を送るための同社の様々な設計を体験し、自分たちの視野が広がり、専門知識の面から優れた点を吸収できたと同時に、この国の社会的弱者への対応や措置についても知ることができた。彼らの配慮はとても行き届いており、社会的弱者の立場から真に必要なものを考えることで身体の不自由な人や高齢者に適した設備を生み出している。日本の思いやりについては非常に素晴らしく、設計から発想まで、そのいずれにも感銘を受けた。

大学名：北京建築大学

氏名：張堯

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回、私たちは朱団長と共に日本での交流と学習を行い、とても有意義な体験をすることができた。以下にいくつかの

点から感想を述べてみたい。

まずは日本の教育について。みずほ銀行を訪れた際私は、中国は対一の競争であるのに対し、日本の教育はグループにおける競争、即ちチームワークを重視していることを知った。京都大学を訪れた際は彼らの教育は興味を主としている、即ち啓発式教育であり、さらに学生の多くの後顧の憂いを解決していることを知った。またホームステイでは、子どもにもテスト用の勉強だけをさせるのではなく、知育類のゲームによって子どもの思考を引き出し、問題を解決している様子を目にした。

次に日本のマナーについて。日本の「他人に迷惑をかけない」という考え方は日本人一人ひとりに浸透している。例えば地下鉄ではグループで行動している人が一緒に座れるように日本の人々は席を譲る。エレベーターでは他の人の邪魔にならないようリュックを身体の前にもってくる。それと同時にエチケット用語も普及しており、人と会う際には一般的に笑顔で「こんにちは」と伝え、移動の際は近くのスタッフが、サポートが必要かどうか声をかけ、お別れの際は手を振り、他人に迷惑をかけた場合はお辞儀をしてお詫びの気持ちを伝えるなど、これらはいずれも日本人の高い素養の表れである。

建築の面では、彼らは利用者をメインに考えている。特に積水ハウスの見学では、同社が住む人の年齢や健康状態等を考慮し、調節可能な型枠によりその人個人に適した家屋を作っていることを知った。その中には、ドアノブの角度や高さ、通路の幅、厨房の遮蔽など多くの細かな部分が含まれている。省エネについては、同社は比較により省エネの素晴らしさを示している。耐震については、優れた素材により家屋の減衰比を強化することで耐震の目的を達成している。

いずれにしても、日本は全体的に良好な状態にあり、人々の生活水準や幸福度も高い。高い素養と強いソフトパワーは日本の優れた一面を示している。これらは私たちが学ぶべきものである。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 孫帥

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

今回の体験活動について、私は集団意識そしてマナーや思いやりの面から分析をしてみたい。

まず、集団意識については、みずほ銀行において強く感じる事ができた。みずほ銀行の従業員は本社からの教育に常に感謝の気持ちを持っており、討論のコーナーにおいて従業員からは、一部の部署で急に人が足りなくなった場合は、その部署での基礎知識がなくともサポートに入ることを希望する人がいて、彼らは学習や勤務を通じて会社全体の利益のために自分を高めているとの話を聞いた。こうした点についてはとても感服させられた。なぜなら中国では、そうした場合は放っておくか見て見ぬふりをすることがほとんどで、自分の仕事だけをやれば良いと考えるからである。だが、これは一つの集団の発展においては何のプラスにもならない。そのため、日本のこうした考え方の教育及び再教育の面の先進性は私たちが学ぶべきものである。

次に、マナーや思いやりについて。各ホテルでの宿泊中、ホテルのスタッフは私を見かけると必ず会釈をし、何か尋ねた場合は丁寧に対応をし、詳しくないことでも可能な限り問題を解決しようとしてくれた。洋服を売る店内では、携帯をいじったり座って休んだりしている店員を見かけることはほとんどなく、彼らは常に立っているか商品の整理をしていた。また試着の際彼らは他の人が入らないよう試着室のドアの前で見張っていて、さらにお客さんの好みに合わせて商品を選び、持って来てくれた。そしてお客さんが出てきてから改めて選ぶのである。これが恐らく日本のサービス業が世界をリードする理由であろう。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 黄蘇

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

国民性についての理解：ホームステイの2日目に江戸博物館に行く途中に東京慰霊堂を通りかかった。ここは関東大震災や東京大空襲の犠牲者のために建てられたものである。ここでとある問題を突きつけられる。それは即ち、災難の前には、それがどのようなものか、どのようにして起きた災難かを問わず、人間そして人間らしさこそが最も尊いものであり、惜しまれるものであるという点である。これは俗に言う侵略戦争に関する歴史認識の問題にかかわるが、こうした問題への長きに渡る思考の中で、私は慰霊堂を訪れたこの日ついに考慮すべき一つの要素に気が付いた。それは、日本は「人」をととても重視する国であり、戦争の性質の如何を問わず、戦争中の罪のない庶民は亡くなった後に口を開くことは永遠にない。時にもし指令を下した人と軍隊とを区別して論じるのであれば、彼ら以外の庶民はこうした苦痛を永遠に受け続ける人々であり、実際のところこれは大和民族の特性（人間、人間らしさ、人の個性への重視）から言えば、容認できるものである。これは歴史認識と反省の態度とは直接の関係はないが、いかなる人も理性のみで動く機械ではない。

マナー：北京はすでに中国国内において市民の素養が比較的高い都市と認識されているが、東京に比べれば依然として見劣りする。その最も明らかな違いは、電車やエレベーターに乗る人は、降りる人が全員降りてから乗り込む、エスカレーターでは例外なく片側の道を空ける、人混みで他人にぶつかってしまった際にすみませんと謝る、これらは単にマナーの順守もしくは習慣というだけでなく、すでに当たり前だが心温まるディテールとなっている。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 陳錦儀

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

8日間の訪日活動は楽しく終えることができた。この8日間において私たちは多くの土地を訪れ沢山の収穫を得た。ここでは、日本において目にした、学んだ一部の技術について述べてみたい。これらの技術は今後中国においてニーズが高まる、或いは中国において広く手本にすべきものだと思っている。リスト形式で以下述べていく。

1. ウォシュレット：日本に来る数日前私は丁度生理期間で、こうした時期の旅行はとでもつらいものである。しかし日本のウォシュレットのおかげで私の旅はかなり快適であった。中国人や日本人が理想とするトイレは似たものだと思っている。誰もが清潔で乾燥した環境と共に、使用後はきれいに、またしっかりと乾かしたいと思っている。日本のトイレは本当に人にやさしい。中国でもいつか実現してほしい。

2. 仕切られたトイレと浴室：中国のトイレと浴室は通常「根こそぎ」形式で、浴室とトイレ、洗面台が一つの空間に置かれている。一方、ホストファミリー宅ではそれらが三つの空間に分かれていて、一つはトイレ（小型の手洗い付き）、一つは浴室（お湯を自動で入れる、水温調節可能な浴槽、シャワー、地面の材質も特殊素材で快適、また滑り防止、急速乾燥が可能）、さらに洗面台の空間となっている。こうすることで清潔且つ衛生的で、また利用にも便利（トイレ、お風呂、洗顔をそれぞれ単独で行うことができる）である。現在中国国内の一部の家庭ではこうしたスタイルを導入しているが、まだ普及はしていない。

3. 美術館、博物館：ホストファミリーから連れて行ってもらった日清のラーメン博物館では、インスタントラーメンの歴史について知った他、さらにDIYで自分だけのインスタントラーメンを作った。また人民大学の学生との交流を通じて、彼が訪れた横浜美術館の展示内容が豊富で、様々な流派の展示の他、展示内容の変更の頻度も高いことを知った。中国は

こうした点についてさらに強化すべきだと思う。首都の北京であっても、こうした美術館や博物館の数や質のいずれも不十分であり、他の都市については言うまでもない。美術館や博物館は一つの国のソフトパワーの表れであり、子どもへの教育や情操教育に非常に重要であることから、重視していくべきである。

以上が私の話したい三つの事柄であり、その他の細かな部分についてはスペースの都合により割愛する。この三つについては実際には「技術」とは言い難いかもしれないが、私が日本においてとても優れていて私たちに足りないと感じた部分である。若者は天下を胸に抱き積極的に思考するべきである。自分たちの努力を通じて祖国に貢献できることを願っている。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 張会

テーマ： 1.国民性についての理解

4.日中間の交流

日本での数日間では、日本の経済、文化、人文等について全面的に理解できたとは言えないが、私自身の体験としては日本に対する印象はより深くなった。

まず最も印象深かったのは日本の秩序であった。ショッピングモールであれ地下鉄駅や道路であれ、通行人は整然と列を作っていた。ホストファミリーと訪れた観光スポット、ショッピングモールや地下鉄のいずれにおいても日本国民の自覚が感じられ、大声で騒いだり列へ割り込んだりといったことはなかった。そして、ホストファミリーは私が行きたい場所、食べたいものを尊重し、それらの場所を苦勞も厭わず案内してくれた。上野公園近くの歴史資料館では展示されていた玩具に興味を持ち 30 分近くパズルをし、最終的に完成はしなかったが、ホストマザーはそれを待っていてくれただけでなく、時折手助けもしてくれた。私は日本を訪れる以前にすでに日本人の思いやりの性格については知っていたが、実際にそれを体験するとやはりとても感動した。

二つめは日中間の交流であった。大学において学生らとグループ討論をした際、各自が自分の国の大学入試制度や就職活動における課題について述べる中で、多くの共通点と相違点を発見することができた。日本では学部を卒業した後大部分の人が就職をするが、中国では大学院への進学や海外留学をするケースが比較的多い。一橋大学での討論においては、大学に入学する上で日本の浪人生はその年の学生と同等の機会を有していることを知ったが、中国の一部の大学では浪人生は募集しない。討論の結果分かった相違点から見て、日中双方とも相手側について学ぶことの余地があり、こうした学習は各人同士の交流や意思疎通によって実現するものだけと言える。

短期間では日中双方の違いについて完全に把握することはできないが、今回の訪問においては日本人のマナーや思いやりといった側面を目にすることができた。そしてこの点もまた双方の交流によって実現したものである。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 戴泳豪

テーマ： 4.日中間の交流

日中間の交流は増加を続けているが、依然として多くの問題を抱えている。例えば、日本から中国を観光で訪れる人の数は毎年約 40 万人と極めて低い水準のまま、中国から日本を観光で訪れる 800 万人という数字に比べるとあまりにも低い数字である。こうした現実、中国人の日本への印象が良くなる一方、日本人の中国への印象は特に変化して

いないという状況をもたらしている。日本から中国を訪れる観光客の数が低迷を続けることについて三井物産の日中研究所の研究者に質問をしたところ、一方では日本の人口の減少、もう一方では各年代の旅行先の違いといった原因があり、現在日本の若い男性は海外旅行を好まず、若い女性は「韓流」文化の影響から韓国へ旅行に行くことを好み、また比較的裕福な高齢者の多くは中国へ旅行に行くことを好んでいる。そして、中国が日本人観光客を呼び込みたいのであれば、日本の若い女性向けのPRを強化すべきとのことであった。

もちろん、観光は日中間の交流の一つの側面に過ぎない。私は、大学生訪問団のような民間交流もとても大切だと思う。なぜなら未来は若者が主役であり、若者が持つ態度は両国関係の先行きを大きく変えるからである。両国の若者が正しい情報を獲得し、双方が友人となれることを意識し、その観点もしくは認識を多くの身近な人に紹介することは非常に重要だと思う。